探偵オペラ　ミルキィホームズ物語

武蔵野レイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
探偵オペラ　ミルキィホームズ物語

【Ｎコード】
Ｎ７１３９Ｒ

【作者名】
武蔵野レイ

【あらすじ】
探偵チームミルキィホームズ結成をした４人の彼女たちは探偵になるために小林オペラのもとで怪盗事件にかかわることになる・・・。
これは、ミルキィホームズ結成後からの話を書いたものです。設定はゲーム版を中心にしていこうと思います。オリキャラを登場させる予定でオリジナル展開があったりすることもあるので苦手な人は注意してください。基本的に主役は小林オペラでいく予定です。

登場人物１（前書き）

初の割り込み投稿です。

登場人物１

ミルキィホームズ＋小林オペラの紹介を書きます。あとかなり下手な絵ですが、オリキャラのメイ・マーブルの人物図も書いてみました。

シャーロック・シェリンフォード
リボンがトレードマークの１５歳の女の子。勘はとてもいいものを持っている。トイズは、念じただけでモノを動かせるというものだが、見えていないとだめで１Ｋｇより重いものはダメなので自分のトイズにコンプレックスを持っていたが、小林の一言により、少しは自信を持てた模様。元気で明るいがドジを良く踏んでしまう。ただアニメ版と違い、ゲーム版においてはただ明るいだけではない。探偵になった理由は困っている人を助けたいということだったが、直接的な理由は不明。

譲崎ネロ
アホ毛がトレードマークの女の子。トイズは、電子機器を操れること。ただし、深く干渉するには金属のヘラを用いなければならない。あまり他人に興味を持つことはないものの動物に対しては心を開く。また、小林に対してはよくからかっている。もっともゲーム版とアニメ版で変わった人物の一人である。お菓子をよく食べていて、帽子の中にお菓子が入っていることも。過去に人間不信なところがあったがエリーにあって徐々に心を開くようになる。コーデリアと時々意見が合わないこともあるものの、なかなかゲームにおいては万能でアニメでは何を間違えたのだろうか。（作者はアニメのネロも好きだが）

エルキュール・バートン

恥ずかしがり屋の女の子。トイズは、自分の力、重さ、固さの３つを上げることができること。過去にトイズのせいで誰かを傷つけたことがあるようでコーデリアと会うまでは極度に人を傷つけることを怖がっていた。ただし、それでも自分のトイズを他の人に見られるのは恥ずかしいようだ。ミルキィの中では１番アニメ版とゲーム版の変化がないが、ところどころ違いがみられる。

コーデリア・グラウカ
ミルキィの中では一番年上の１７歳。トイズは、五感強化。時々、暴走してしまうこともあるが、メンバーのことをしっかり守らなくきゃとおもっているしっかりした女の子。妹がいる（生死不明）。小林のことは尊敬していて教官と呼ぶ。護身術も身につけていて、荒事にも対応できる。アニメ版のコーデリアは何だったのかと思えるほどゲーム版との違いがでている。

小林オペラ
元名探偵。怪盗Ｌとの戦いでトイズを失ってから探偵としての自信をなくした。とはいえ、洞察力は衰えておらず、並みの探偵では足元に及ばないほどの能力を見せる。失う前にもっていたトイズは不明だが、トイズがあったころはどんなにすごかったのだろうか。このてのゲームの男キャラとしては高い人気を誇り作者自身も好きな男キャラの１人である。アニメに出てきたらどうなってしまうのだろう。決め台詞は「そう、これは重要なファクターだ。」

メイ・マーブル
＞ｉ２０６３８－２７７８＜

プロローグ（前書き）

初めての小説投稿です。素人なので誤字、脱字などがあったら指摘してください。

プロローグ

「あ、ネロ、エリーさん、コーデリアさーん」
そう大きな声で呼ぶのは、シャーロック・シェリンフォード。大きなリボンが特徴でここホームズ探偵学園の生徒である。仲間からは、シャロと呼ばれている。
「あら、シャロ」
そしてその返事にこたえたの彼女の名は、コーデリア・グラウカ。髪には花模様の飾りがある。
「おはよう、シャロ」
そうあいさつしたのは、譲崎・ネロ。1本ぴょんとたった髪が特徴のボーイッシュな女の子だ。
「おはよう、シャ・・あうっ」
そしてあいさつの途中で舌を噛んでしまったのは、エルキュール・バートン。恥ずかしがり屋の女の子だ。
コーデリア「ちょっと、エリー大丈夫？」
コーデリア達は、心配して駆け寄ると
「どうかしたのかい？」
とそんな4人に声をかけるものがいた。彼の名は小林オペラ。かつて名探偵と呼ばれ現在は彼女たち4人のミルキィホームズの指導者をしている。
コーデリア「あ、教官、実はエリーが舌を噛んでしまって」
小林「そうだったのか、大丈夫かい、エリー」
と小林がたずねると
エリー「はい、だいじょうぶれす」
とすこし涙目になりながらエリーは答えた。
小林「それは良かった。じゃあみんな学院にいこうか。このままだと遅刻するぞ」
ミルキィホームズ「はい」

この物語はそんな彼女たちミルキィホームズとそれを指導するかつての名探偵の物語である。

プロローグ（後書き）

初めての小説どうだったでしょうか。次回から本編に入る予定です。
更新速度は遅くなることもありますが、よろしくお願いします。

予告状（前書き）

あまり、小説を書くことに慣れていないので文章は短めになっているかもしれませんが、ご容赦ください。最後まで読んでくれると嬉しいです。

予告状

シャロ「先生、大変です。」
小林が書類整理をしていると探偵事務所にシャロ達ミルキィホームズが入ってきた。
小林「どうしたんだい、みんな。」
会長「それは、私から説明します。」
そう言ってはいってきたのは、アンリエット・ミステール。この学院の生徒会長だ。
会長「実はこの学院に予告状が届いたんです。学院のほうでも予告状が届いた以上、放っておくことはできませんので。」
そういって、アンリエットさんは予告状の内容を読み上げた。
会長「今夜、ヨコハマ美術展にある絵画＜宝の欠片＞を頂く。怪盗キャット・セブンより」
小林「怪盗キャット・セブンと言えば、最近ヨコハマで活動しているあの怪盗ですか？」
会長「はい、主に美術品を中心に狙っている怪盗で何件も被害が確認されています。」
シャロ「それじゃあ、早くヨコハマ美術館に行かないと。」
ネロ「そうだね。どっちにしろこのままってわけにはいかないよね」
コーデリア「そうね、まずはヨコハマ美術館に行きましょう。」
エリー「私も行くべきだと思います。」
小林（ついにミルキィホームズに最初の本格的な事件が入ってきたか、何事もなく終われればいいのだけれども・・・）
そうして小林達一行はヨコハマ美術館へと向かった。

予告状（後書き）

シャロ「ついに本編が始まりましたね。」
作者「はい、なんとか投稿することができました。オリジナル怪盗をつくってしまいましたが受け入れられるか不安で。次回はＧ４が登場する予定です。」

Ｇ４登場（前書き）

ようやくＧ４登場です。前２つの文章よりは長いですが、相変わらず短いです。気軽に読んでいただけると助かります。

Ｇ４登場

ヨコハマ美術館に小林一行たちが到着すると

小林「神津、お前もきていたのか。警察にも予告状がとどいたのか？」

そこには、Ｇ４とそれを指揮する１９歳にして警視になった小林の同級生である神津鈴がいた。Ｇ４とはＧｅｎｉｕｓ４の略で警察が対怪盗用として組織したものだ。

神津「ああ、お前たちにも届いたか。予告状が来た以上警察としても放ってはおけん。」

シャロ「ああ、ココロちゃんだ。」

小衣「ココロちゃんっていうな」

今、ココロちゃんと呼ばれたのが明智小衣という名前の１３歳の女の子だ。Ｇ４のリーダーで能力はあるはずだが、ミルキィホームズに対抗心を燃やしているためよく現場で衝突する。

次子「よう、みなさんお揃いで」

いま、あいさつしたのが銭型次子。Ｇ４では乗り物担当とのことでＧ４のお姉さん的役割も兼ねている。

咲「ちーす」

やる気のなさそうにあいさつしたのが遠山咲、主に電子機器担当になっている。

平乃「こんにちは」

そういって礼儀正しくあいさつしたのが長谷川平乃。主に接近戦担当の礼儀正しい女の子でラクロスのスティックを持ち歩いている。

小林「まずは、宝の欠片を見たい。どこにあるんだ？」

神津「こっちだ。案内してやる」

そうして小林達が連れて行かれたところには1枚の絵があった。

シャロ「すごい絵です。」

コーデリア「本当ね・・」

エリー「きれいな絵です」

ネロ「そうかな・・・」

そういってお菓子をネロが食べ始めたので

コーデリア「ネロ、美術館内でお菓子は禁止よ。」

ネロ「おっと、いけねえ」

そう言ってお菓子をしまった。

???「はは、次からは気をつけてくださいね。」

そういって、猫を連れた優しそうなおじさんが姿を見せた。

小林「あの、あなたは？」

館長「申し遅れました。私はこの美術館の館長をしているものです。このたびは予告状のことで来ていただいてありがとうございます」

館長はそういって頭を下げた。

小林「いえ、こちらこそ。ご協力ありがとうございます。私は小林オペラ。そして彼女たちは探偵学院の子たちです」

館長「探偵学院の子たちでしたか。」

ネロ「ねえ、ちょっときいていいかな？」

館長「あ、はい、いいですよ」

ネロ「あのさあ、ここ美術館だよね。動物ってさ中にいれていいの？」

館長「はい、実はここはあまり貴重な美術品はあまりなく、私が趣味でいろいろな人が書いた絵を集めていてそれを公開しているだけですので基本的には動物を連れてても構いません。」

ネロ「ふーん。」

小林（猫を中にいれてもてもいい美術館なんて珍しいな。動物を飼っている人にとってはありがたいだろうな）

館長「あのそれであなた方のご用件は？」

シャロ「あ、はい今日怪盗キャット・セブンから予告状が届いて」

ネロ「今夜、宝の欠片を頂くって」

コーデリア「それで私たち、宝の欠片を守りたくって」

エリー「あの、どうか捜査をさせてくれませんか」

小林「あの、館長さん。僕からもお願いします。宝の欠片を守らせてくれませんか？」

館長「あ、はいもちろんいいですよ。警察の方たちにも同じお願いをされているので両方にお願いさせてもらいます。」

神津「あなたが了承するのなら私に異論はない。」

シャロ「やったー。ココロちゃん。一緒に捜査しようね。」

小衣「ココロちゃんって言うな。絶対あんた達より早く怪盗を捕まえるんだから。あなたたちの出番はないわよ。」

シャロ「それじゃあ、早速捜査開始しましょう。」

小衣「話をきけー」

次子「小衣、楽しそうだな」

咲「なんか、おされてない」

平乃「私たちも捜査を始めましょう。」

G４登場（後書き）

ネロ「ついに次回からは捜査開始だね」
作者「はい、カンがいい人は怪盗のトイズが予想がつくかもしれませんね。」
シャロ「どんなトイズなんですか？」
作者「はい、それはまだ秘密ということで。次回は事件の捜査開始になります。少しでも楽しんでいただければ幸いです」

捜査開始（前書き）

ようやく、捜査編を書いてみたんですが・・・。矛盾があるような気がするし、推理物としてはちょっと微妙な気もします。なかなか、推理物を書くのは難しいですね。駄文になってしまっているかもしれませんがよければ読んでください。寛容に見てくれると嬉しいです。

捜査開始

ミルキィホームズの４人はそれぞれ捜査を始めた。そこで小林はまずシャーロックに声をかけてみた。
小林「やあ、シャーロック。捜査はすすんでるかい。」
シャロ「先生。はい、壁になにか仕掛けがないかを調べています。」
小林「壁に仕掛けか。おもしろいところに着目するね。」
シャロ「あうっ。やっぱり変でしょうか？」
小林「そんなことはない。探偵の基本はいろんな可能性を考えることだからね。いいと思うよ。それで何かみつかったかい？」
シャロ「はい、実はひび割れが見つかったんです。」
小林「ひび割れ？」
シャロ「はい、あの壁のひび割れです」
そうしてシャーロックが指差したところには確かにひび割れがあった。だいたい、３０センチメートル四方もないくらいだろうか。そのひび割れをみて小林は館長を呼んだ。
小林「館長さーん」
館長「はいなんでしょう」
小林「このひび割れって前からあいていたものでしょうか？」
館長「いえ、初めてみました。隅のほうだし影になっているから気づかなかっただけかもしれませんが。こんど直さなくてはなりませんね。」
小林「すいません。お手数をおかけしました。」
館長「いえ、こちらこそ。それでは」
そう言って、館長は仕事に戻っていった。
シャロ「先生、このひび割れたところ、少し押したら穴が空きそうですね。もしかしてこれって・・」
小林「ああ、これは重要なファクターだ。」

小林は今度はネロに声をかけた。
小林「やあ、ネロ捜査はすすんでいるかい？」
ネロ「ああ、小林。少し気になるものがあってさ。ちょっと見てみてよ。」
小林「気になるもの？これは・・猫の毛？」
ネロ「うん、あそこの壁から宝の欠片の絵まで同じ毛が少し散らばっているけどつながっているようにおもえない？」
小林「あの壁はさっきシャロがひび割れを発見した・・」
ネロ「ひび割れって？」
小林はさっきのシャロとのやり取りを教えた。
ネロ「小林もしかしてこれって・・・」
小林「ああ、これは重要なファクターだ。」

次に小林はエルキュールに声をかけてみることにした。
小林「エルキュール、捜査は進んでいるかい？」
エリー「あ、はい。ちょっとキャット・セブンの過去の事件の記録を見ているんです。銅像から絵までいろんなものを盗んでいるんですけど怪しいと思える人はカメラには写っていないんです。」
小林「写っていない？」
エリー「はい。防犯カメラに細工をしたんでしょうか？」
小林「うん、確かにそれも考えられる。でも写っていないのは犯人だけでカメラも故障しているわけではない。他に考えられることはないかい。たとえば、君が正体を隠したいときにきみはどうする？」
エリー「隠したいとき・・・・。あ！」
小林「そう、これは重要なファクターだ。」

小林は次に何やら調べているコーデリアに声をかけた。

小林「コーデリア。なにをしらべているんだい？」
コーデリア「あ、教官。過去の事件の現場周辺を調べていたんです。」
小林「そうか、それでなにかわかったことはあるかい？」
コーデリア「はい、過去の事件の現場周辺では共通して動物の大量発生が起こっているんです。犯人は動物を使って誘導しているんでしょうか？」
小林「確かにそうも考えられる。でも考えてごらん。動物がたくさんいたら一匹一匹には目はまわらないよね。そうすると・・・」
コーデリア「そうすると・・・・あっ！」
小林「そう、これは重要なファクターだ。」

そうして夜になり、犯行時間が近づく。神津達は外で警備している。美術館がいきなり停電になった。コーデリアがすかさずトイズで状況を確認する。コーデリアのトイズは、五感強化で暗い中でも視界が開けるのだ。すると
コーデリア「いました。」
と小声で話しました。そして、その人物が絵に手を掛けようとした瞬間
コーデリア「そこまでよ。」
？？？「！？」
小林「君が怪盗キャット・セブンだね。」

捜査開始（後書き）

コーデリア「捜査は無事終了ですねですね。」
作者「はい。なんとか投稿することができました。内容は、もうすこしうまく書けないだろうかと思っていますが。ネタはあってもなかなか文章にするのは難しくて試行錯誤しています。」
エリー「えっと、次はついに、犯人を追いつめます」

暴露開始（前書き）

もはや、原作とはずいぶん違っていますがこれでとりあえず一区切りの話です。

暴露開始

ネロ「わあ、本当に小林の言った通りだよ」
ネロが、トイズ〔ダイレクト・ハック〕により部屋の電気を回復してから言う。
絵の前に立っていたのはなんとネコだった。
シャロ「可愛いネコさんです。」
エリー「本当。」
小林「もう君は包囲されている。あきらめて捕まるんだ。」
???「さすがは、トイズを失ったとはいえ、名探偵。やっぱり私じゃ力不足だったのかな。」
そういって一瞬のうちにネコは少女の姿になった。背はコーデリアより少し小さいくらいだろうか。年齢もあまりミルキィホームズのみんなと変わらないくらいだろう。
キャット・セブン「なんで私のトイズのことが分かったの？」
小林「過去に盗んだ銅像や絵なんて大きなもの外にそう簡単に持ち出せるものじゃない。だからなにかしらトイズがそこにかかわっていると思ったんだ。」
キャット・セブン「でもそれだけで、私のトイズがわかるものかしら」
小林「それだけじゃない。彼女たちの見つけた重要なファクターがある。シャーロック。」
シャロ「はい。私が壁を調べていたらひび割れを見つけました。それも少し押したら３０センチメートル四方に穴が開くような。館長さんはこのひび割れを知りませんでした。つまり、つい最近できた可能性が高い。これは無視できないことだと思います。」
小林「よーし。ネロォ。」
ネロ「はいはーい。そのひび割れから絵までの間なんだけどさ。ネコの毛が落ちていたんだよねー。当然ここは、動物を連れてもいい

美術館だからあってもおかしくないと思うけど、どんなに調べてもそこにしかそのネコの毛は落ちていなかったんだよねー。これは見過ごせない事実だとおもうなぁ。」
小林「よーし、エルキュール。」
エリー「あっはい。私は過去のキャット・セブンの事件を調べました。防犯カメラを調べていたんですけれども怪しい人物は写っていませんでした。これは、犯人が防犯カメラに何らかの細工を行った、もしくは何らかの方法で防犯カメラの死角を移動したと考えられます。」
小林「よしっ。コーデリア」
コーデリア「はい。私は過去の事件の現場周辺を調べました。すると何匹かの動物が目撃されているんです。これ自体は珍しくないかもしれませんが、盗まれた美術品の数と一致していたんです。これは、重要なことだと思います。」
小林「つまり、君は自ら動物に変身し、また美術品をも動物に変えることによって警備の目をすり抜けた。その後、おそらく美術品を回収していたのだろう。」
キャット・セブン「さすがは名探偵。私のトイズは大きさや時間などの制限はあるものの無機物を動物に変えたり、自分が動物になったりするものです。その洞察力、並みの探偵は足元にも及ばない。お父様が敵わなかったことはあります。今日のところは私の負けのようですね。」
小林「お父様？」
キャット・セブン「はい、私はかつてあなたが対決して敗れた怪盗スリー・セブンの娘です。小林オペラ復活のうわさを聞いて怪盗を始めたんですけどやはり敵いませんでした。でも、不思議と満足できたので良かったです。おとなしく、捕まることにします。」
その後、神津達により怪盗キャット・セブンは連れて行かれた。美

術品は、すべて返還された。未成年ということもあり、そこまで重い罪にはならないだろう。そして数日たった今、僕たちは事務所にて今回の事件についてまとめている。
シャロ「キャット・セブンさん。どうなったでしょうか？」
小林「うーん、重い罪にはならないと思うけれども警視庁の判断がでるまでははっきりとは分からないな。」
コーデリア「でも、さすがは教官ですね。いままで捕まえることができなかった怪盗を捕まえてしまうんですから。」
エルキュール「すごいです・・・。」
ネロ「さすがは、小林って感じ」
小林「はは、そんなことはないよ。君たちが発見した重要なファクターがなければ、こうはいかなかったんだから。」
会長「ちょっといいですか？」
小林「アンリエットさん。どうかしたんですか。」
会長「はい、実は怪盗キャットセブンの処遇が決まったので御報告に。怪盗キャット・セブンは、本日をもって我が学院に入学することになりました。」
全員「えーーー」
驚きでみんな声をあげた。
小林「えっと、それはまたどうして？」
会長「はい、皆さんご存じのように怪盗の数に比べて探偵の数は少ないです。だからこそ我が学院ができたわけです。ただ、それでも対応しきれなくて。それで今回は怪盗を探偵に更生させるプロジェクトを始めました。その1号としてみなさんと同じ年ごろの彼女が選ばれたんです。それでみなさんにも彼女が探偵になれるようにサポートしていただければと思いましてお願いしにきました」
小林「なるほど、確かに元怪盗ともなれば何か問題が発生するかもしれない。でもなんでぼくたちが？」
会長「はい、まず第一に彼女が小林さんたちのことを気に入ったみたいだからということ。そして、あなたたちなら彼女を受け入れて

くれると思ったからです。」
ネロ「でもさ、彼女って信用できるの？」
会長「私が見た限り裏切るなどの心配はなさそうです。小林さん、面倒をみてくださいませんか？」
小林「うーん。自分が過去に関わった事件の関係者のようだし・・・。大したことはできないかもしれませんが、引き受けさせてもらいます。」
その発表にシャロは、
シャロ「わーい。新しい仲間がまた増えますね。」
と早く騒いでいる模様。一方、恥ずかしがり屋のエリーは
エルキュール「えっと、どうしよう。私、サポートなんて・・・。」
コーデリア「そんなに気を張らなくても大丈夫よエリー。」
会長「では、入っていただきましょう。」
小林「えっもうきているんですか？」
そうしているうちにドアが空き、少女がはいってきた。
キャット・セブン「また会いましたね、みなさん。私は本当の名前はメイ・マーブルと言います。この前は、ご迷惑をおかけしてすいませんでした。今後、よろしくおねがいします。」
そういって、メイ・マーブルは頭を下げた。
小林「えっと、メイさんと呼べばいいのかな。」
メイ「呼び捨てで構いません」
小林「えっと、メイ。こちらこそよろしくね。」
ミルキィホームズ「よろしくお願いします。」
こうして、学院に新たな転入生がやってきた。

暴露開始（後書き）

メイ「新たに学院に転入してきました。みなさんよろしくお願いします。」

作者「実は、メイはゲストキャラとしてこの事件だけの出番だけの予定だったんですが、ちょくちょくと登場させたくなってこのような形にしました。次回は、ミルキィホームズの日常を書く予定です。」

ミルキィホームズプールへ行く（前書き）

今回はミルキィのみんながプールへ行きます。途中選択肢があるので好きなのを選んでください。選んだ選択肢によって誰が関わるかが変わります。気に入ればまた、選択肢を小説に使うかもしれません。

ミルキィホームズプールへ行く

小林は、プールにいた。なぜなら、今日はミルキィホームズのみんなと事件解決のご褒美としてプールに連れていく約束をしたからだ。
小林（気まずい・・・・。）
少し早く来てしまったので待っているのだが、一人で待つのはやはり気まずいものがある。２０分くらい待った後だろうか、
シャロ「先生ー」
後ろを振り返るとミルキィのみんなが着替えをすでに終えてこっちへ来ていた。
コーデリア「すいません教官、待ちました？」
小林「はは、こっちが早く来ちゃっただけだから。」
エルキュール「本当はもっと早く来たかったんですけれど準備に時間がかかってしまって・・・。」
ネロ「はいはい、そこまで。せっかくプールにきたんだから早く遊ぼうよ」
小林「そうだね。まずはどこへ行こうか」
シャロ「まずは、ウォータースライダーに行きましょう。ここのウォータースライダーってすごいんですよ。」
ネロ「いいねぇ。それじゃあそこに行こうか。」
するとエリーが
エリー「ウォータースライダー、怖いです。ここで見ておきます。」
といった。エリーはこういったものが苦手なのだ。
コーデリア「大丈夫よエリー。ここのウォータースライダーは、高さが３つにわかれていて一番小さいのだとそんなに高くないから。」
エリー「でもっ。やっぱり怖いから。」
コーデリア「そう・・・。それじゃあ一回みんな滑った後ここにみんな集まることにしましょう。」
ネロ「それじゃあ僕は一番高いウォータースライダーに行くよ。」

シャロ「私は2番目に高いウォータースライダーにします。」
コーデリア「私は一番低いウォータースライダーにします。」
ネロ「小林はさっ。どの高さのウォータースライダーに乗る？」
小林「僕？僕は・・・」

（選択肢）
1、1番高いウォータースライダー
2、2番目に高いウォータースライダー
3、1番低いウォータースライダー
4、ここに残る

：1、一番高いウォータースライダー
小林「せっかくだから1番高いウォータースライダーに行くことにするよ」
ネロ「分かってるねぇ。小林それじゃあ早速行こう。」
ネロはそういって小林の手を引いた。
小林「ちょっ。ネロ」
ネロ「早く早く―。」
そうして、ウォータースライダーについたものの混んでいて、滑るまでしばらくかかりそうだ。
小林「もうしばらくかかりそうだね。みんな待っているかな？」
小林がネロにそういうとネロは少し不満そうに
ネロ「小林。せっかく今二人きりなのに他のみんなのことは考えないで。せっかくカップル気分を味わっているのに。」
小林「カップルって。またそうやって僕をからかって。」
ネロ「ふふっ。赤くなっちゃって。小林ってさ本当に面白いなあ。」
小林（駄目だ。この子には敵わない・・。）
ネロ「あっ。僕たちの番みたいだよ。早く滑ろう。」
そういってネロは僕の膝の上に乗った。

小林「何で僕の膝の上に乗るんだい。」
ネロ「いーじゃん。細かいことは気にしない。」
小林「いや、僕は恥ずかしい。人目もあるし。」
ネロ「いーじゃん。見られても。それに後ろがつかえているよ。」
確かに、後ろの人たちが待っているので恥ずかしかったが小林はその体勢でウォータースライダーを滑ってみんなのもとに戻った。
ネロ「あー、楽しかった。」
小林（恥ずかしかった・・・。）

：2、2番目に高いウォータースライダー
小林「2番目に高いウォータースライダーにするよ。」
シャロ「あ、じゃあ私と一緒ですね。一緒に行きましょう。」
そうして、ウォータースライダーについたが、どうやら混んでいてしばらく並ばないといけないようだ。
小林「しばらく並ばないとダメみたいだね。」
シャロ「はい、でも待っている間もわくわくして楽しいです。」
小林「ははっ。シャロは、元気だね。」
シャロ「はい、この日を楽しみにしていましたから。こうしてみんなでプールに遊びに来るなんて初めてですから。」
小林「じゃあ、今日はめいいっぱい楽しまなくちゃね。」
シャロ「はい、先生も一緒に楽しみましょう。」
小林「うん、そうだね。」
シャロ「あ、順番がきたみたいです。滑りましょう」
そういってはしゃぎながら滑って行った。
小林（あんなに喜んでもらえると連れてきたかいがあるなぁ。じゃあ、僕も滑ろう。）
そして、小林が滑り終わるとシャロがいない。
小林「シャーロック！」
シャロ「先・・先生ー」

見るとシャロが沈んでいる。小林はあわててシャロをもちあげた。
小林「大丈夫かい、シャーロック」
シャロ「はい、先生のおかげで。すいませんでした先生。」
小林「君が無事なら良かった。気にしないで」
シャロ「私、いつもそうなんです。いつもはしゃいじゃって失敗しちゃって。分かっていてもいつも失敗しちゃって。駄目ですね私って・・・。」
小林「そんなことはない。」
シャロ「先生・・。」
小林「君は、いつも明るく頑張っていて僕もそういうところに元気づけられているよ。だから落ち込む必要なんてない。ほら、そんな顔をしているとみんな心配するよ。」
シャロ「先生・・。ありがとうございます。私、嬉しいです。」
そういってみんなのところにいつも通り戻って行った。

：3、1番低いウォータースライダー
小林「うーん、一番低いウォータースライダーにするよ。」
コーデリア「本当ですか！」
小林「あっ、うん。」
コーデリア「じゃあ、早速行きましょう。」
小林「そんなにあせらなくても・・・。」
そうして、ウォータースライダーについた。混んでいるみたいでしばらく並ばないといけないみたいだ。
小林「しばらくかかりそうだね。」
コーデリア「そうですね。でも教官と一緒に並べるなら嬉しいです。」
小林「はは、ありがと。」
コーデリア「教官はプールにはよく行ったんですか。」
小林「うーん、僕は結構知らない人と一緒にいると緊張しちゃうこ

とがあるからこうやって大勢で行くのは初めてかな。」
コーデリア「そうなんですか。意外ですね。事件の時は知らない人相手でもあんなに堂々としているのに。」
小林「事件の時は緊張をしている暇がなかったりするからね。経験を積めば君もきっとできるよ。」
コーデリア「私、教官のようになりたいです。そうすれば私ミルキィのみんなも守ることができます。」
小林「君は今でも十分やっているよ。ミルキィのみんなも君を頼りにしている。もうちょっと肩の力を抜いてもいいと思うよ。」
コーデリア「教官・・・。ありがとうございます。私、やっぱり教官を目標に頑張ります。」
小林「ははっ。なんか照れくさいな。」
コーデリア「あっ。順番がきたみたいですね。一緒に滑りましょう。」
そうして、コーデリアと滑ってみんなの元に行った。

：4、ここに残る
小林「うーん。待っていてちょっと疲れちゃったからここに残ろうかな」
ネロ「えー、付き合い悪いなぁ。」
シャロ「それじゃあ先生、ここで待っていてください。」
コーデリア「エリーをよろしくお願いします。」
そうして、みんなそれぞれウォータースライダーに行った。ここに残ったのは、エリーと小林の二人だ。
エリー「あの、良かったんですか、みんなと行かなくて？」
小林「ちょっと疲れちゃったしね。君とこうして話すのも悪くないと思うし。」
エリー「そんな、私なんて。話すのだってうまくないし。」
小林「そんなことはない。君は周りを気遣える優しい人だ。もっと

自分に自信をもっていい。」
エリー「そうでしょうか。」
小林「それに僕もあまり知らない人と話すと緊張しちゃってさ。手汗をかくこともあるくらいだよ。」
エリー「小林さんが・・？」
小林「ああっ」
エリー「ふふっ」
小林「やっぱり君は笑顔のほうがいい。せっかく可愛いんだから。」
エリー「かっ可愛いなんてそんな・・。」
そういってエリーは顔を赤くした。
そのあとしばらくしてみんなが帰ってきた。エリーが顔を赤くしたままなのでコーデリア達に何があったか問い詰められてしまった。

ミルキィホームズプールへ行く（後書き）

コーデリア「今回は事件がありませんでしたね。」
作者「そうだね。まあ僕がミルキィと小林とのからみを書いてみたかったからね。次回は、プール編を続けるか、別のにするか迷っています。なにかネタがあったら送ってくれると嬉しいです。」

爆発発生（前書き）

短いですが読んでくれるとうれしいです。

爆発発生

それはプールでみんなと遊んでいたときのことだった。
小林「！！」
繁華街の方向から爆発音が聞こえた。
エリー「キャー」
シャロ「わわっ。なんですか？」
ネロ「何か爆発した音みたいだね。」
コーデリア「教官、行ってみましょう。」
そうして車に乗り、爆発があった現場まで向かった。するとそこには倒壊したビルがあった。

シャロ「あわわっ。大変です。建物が亡くなっています。中にいた人たちは大丈夫でしょうか？」
メイ「大丈夫ですよ。」
そう言って、現れたのはメイ・マーブルだ。
小林「メイも爆発を聞いてここに来たのかい？」
メイ「はい、お買い物をしていたら近くで爆発音が聞こえてここに来たんです。」
小林「そうか。ところでさっき言っていた大丈夫ってどういうことだい？」
メイ「どうやら爆発が起こる前に予告状が届いていたみたいなんです。それで警察の方たちが避難させていたので無事だと思います。」
小林「予告状？ということはこれは怪盗事件なのか？」
神津「そのとおりだ。」
そういって現れたのは、Ｇ４のみんなと神津だ。
神津「犯行前に予告状が届いてな。避難させるのには十分間に合った。」
小林「なるほど。では、ここに特事捜査権を発動し、この事件の捜

査にあたる。いいな？」
神津「ふんっ。勝手にしろ。」
シャロ「わーい。また一緒に捜査できるね。ココロちゃん。」
小衣「ココロちゃんって言うな。この明智小衣がいる限りあんた達の出番なんてないわよ。」
咲「そんじゃ、まあ。」
次子「ごめんなぁ。こいつ口悪くて。」
平乃「失礼します。」
そういってＧ４のメンバーは向こうに行った。
小林「じゃあ、僕たちも捜査をはじめようか。」
メイ「あの、私も捜査のお手伝いをしてもいいですか？」
シャロ「もちろんです。一緒に捜査しましょうね。」
ネロ「まっ、人手は多いにこしたことはないしね。」
エリー「わたしも大丈夫です。」
コーデリア「私も賛成です。」
小林「それじゃあ、みんな捜査をはじめよう。ただし、危険なことはしないこと、いいね？」
みんな「はい」
そうしてみんなで捜査していると、神津の携帯がなって
神津「はい・・・・なに！」
神津は、電話をきるやいなや車にＧ４を乗せた。
小林「神津、どうしたんだ？」
神津「止めてもくるんだろうな。科捜研の隣だ。」
そういうと神津は車に乗り込んだ。
小林「みんな、僕たちも行くぞ。」
メイ「小林さん、どうしたんですか。」
小林「おそらく、また怪盗が爆破したのさ」
シャロ「えー」
エリー「そんな立て続けに。」
ネロ「それじゃあ、僕らも行かないと。」

コーデリア「行きましょう、教官。」
そうして、小林達は次の現場に向かった。

次の現場に着いた。
小林「これは！」
ネロ「見事に破壊されてるねぇ」
シャロ「あわわっ、大変です。」
メイ「犯人は爆破のスペシャリストなんでしょうか？」
小林「ああっ、おそらくね。」
神津「来たか・・・。」
小林「神津・・。」
神津「お前、だんだん昔のようになっていないか？」
小林「うっ。」
そう指摘されて一瞬言葉に詰まった。
神津「まあ、無茶はするなよ。」
そういって神津は気遣うように言葉をかけると去って行った。
エリー「神津さん、小林さんのこと心配してるみたい。」
コーデリア「そうね、私たちのほうでも教官に迷惑をかけないように気をつけましょう。」
ネロ「それじゃあ、早速捜査しようよ小林。」
小林「あぁ、ただ無茶だけはしないでくれよ。」
みんな「はい。」

爆発発生（後書き）

ついにゲーム本編にあたる部分に来ました。次回は捜査編です。

捜査開始２（前書き）

捜査編が始まります。

捜査開始2

ミルキィのみんなが捜査してからしばらくたった。ここで小林はまず、シャロに声をかけてみることにした。
小林「どうだい、シャーロック？」
シャロ「あ、先生。私いま、ここを捜査していたんですけど、ちょっと気になる点があって。」
小林「気になる点？」
シャロ「はい、ここを見てください。ビルは爆破されているのにこの部分だけ壊れていないんです。」
小林「これは・・・。何だろう、箱があるね。」
シャロ「えーと、中身は・・・。銅鏡ですか？」
小林「ああ、そのようだね。」
小衣「ちょっと、それってこの現場にあったやつ？」
小林「そうだけど。」
それをのぞいていると、ココロちゃんが
小衣「じゃあ、これは証拠物件として預かるわ。貸しなさい。」
そういってココロちゃんはそれを持って行ってしまった。
小衣「警視、また銅鏡を発見しました。」
神津「よくやった小衣、しかしまた銅鏡が落ちていたのか。」
シャロ「もう、小衣ちゃん、強引なんだから。」
小林「それより、シャーロック。いまの会話に気になる点はなかったかい？」
シャロ「気になる点？あっもしかして。」
小林「そう、これは重要なファクターだ。」

つぎに2人で捜査しているネロとメイに声をかけてみた。
小林「やあ、ネロ、メイ2人で捜査しているのかい？」

ネロ「あ、小林。ちょっとね面白いデータをみつけたんだ。」
小林「面白いデータってなんだい？」
メイ「はい、実はさっきここに保険会社の人がいたんですけど、データをみせてもらえなくて、私が保険会社の人にぶつかっている間にネロにデータを移しとってもらったんです。」
小林「そんなことをしてたのか、まあ今回はいいけどあまりそういうことはしないようにね。」
メイ「はい。」
ネロ「はーい。」
小林「で、データって一体何があったんだい？」
ネロ「ほーい、ここにあるよ。」
そうしてネロに見せてもらったデータには
小林「！」
メイ「どうでしょうか？」
ネロ「これはかなり気にならない？」
小林「あぁ、これは重要なファクターだ。」

次に小林はエリーに声をかけることにした。
小林「やぁ、エルキュール。捜査は順調かい？」
エリー「あっ、小林さん。私いままで爆破されたビルを調べていたんですけど、なにかこの中におかしな点はあるでしょうか？」
小林「そうだな・・・・。これを見てごらん。」
エリー「これは、株の出資比率が全部同じ会社になっている。」
小林「そう、つまり爆破されたビルのオーナーは同じだということだ。」
エリー「ということはもしかして・・・・」
小林「ああ、これは重要なファクターだ。」

次に小林はコーデリアに声をかけた。

小林「やぁ、コーデリア。捜査は順調に進んでいるかい。」
コーデリア「教官。はい私はこの部屋の入居者を調べていたんです。見てみますか？」
小林「どれどれ、これは！」
コーデリア「はい、空き部屋が多いですよね。だから、怪盗がビルを爆破する際も避難はスムーズに済んだと思うんですけど。」
小林「ああ、確かにそうだ。だが今重要なのはそういうことじゃない。考えてごらん、君がオーナーだとしたらこのビルをどうする？」
コーデリア「それは入居者を増やす準備をします。それでも無理な場合は・・・・あ！」
小林「そう、これは重要なファクターだ。」

みんなの捜査の結果、事件の全体像がだんだんつかめてきた。そこで小林は、みんなを集めてあるビルへと向かった。
コーデリア「どうしたんですか、ここのビルにみんなを集めて？」
小林「おそらく、次に爆破されるビルはここだ。」
コーデリア「えー、それじゃ危ないんじゃ。」
小林「いや、まだ人がなかにいるから大丈夫だと思うよ。」
そう言って、小林はなかに入って行った。
コーデリア「あ、教官。」
シャロ「行っちゃいましたね。」
エリー「どうしましょう？」
ネロ「僕らも入るしかないんじゃない。」
そういってネロも入って行った。
シャロ「あ、待ってください。」
エリー「おいてかないでください。」
そう言って、シャロ、エリーも入って行った。
コーデリア「みんな、あーもう。」
そうして、みんなビルの中に入って行った。

捜査開始２（後書き）

次回は、たまにはということで本編とはまったく関係ない番外編の話を入れる予定です。暴露編はそのあとになりますのでどうかよろしくお願いします。

番外編１　メイ・マーブルの重要なファクターだ（前書き）

１０００ｐｖ達成できました。見て下さっている方ありがとうございます。前回の予告通り今回は番外編をお送りします。

番外編1　メイ・マーブルの重要なファクターだ

メイ「はい、始まりました。メイ・マーブルの重要なファクターだのコーナーです。このコーナーは私が毎回呼んだゲストとお話をするコーナーです。ではさっそく記念すべき最初のゲストを発表します。コーデリア・グラウカさんです。」
コーデリア「はい、お呼ばれしました、コーデリア・グラウカと申します。」
メイ「では早速質問ですがコーデリアさんは紅茶が好きだとお聞きしましが、本当ですか？」
コーデリア「はい、朝に紅茶を飲むと気分がすっきりして落ち着くんです。」
メイ「そうですか、ということはブレックファスト（朝に紅茶を飲むためのブレンドした紅茶）を飲むんですか。」
コーデリア「はい。」
メイ「へー、おしゃれですね。では次の質問です。コーデリアさんは護身術ができるとのことですがどこで覚えたんですか？」
コーデリア「それは道場で習いました。探偵には荒事も必要になるときがあるので。」
メイ「なるほど。ところでコーデリアさんは小林さんのことはどう思っていますか？」
コーデリア「教官ですか。とても尊敬できる方だと思います。学院に入る前から教官のことは尊敬していましたけれど、会ってからはますます尊敬しています。」
メイ「そうですか、では小林さんのことを異性として意識は？」
コーデリア「え、そ、そんなことは。あ、けっして嫌いってわけではないんですけど。やっぱりそれはまだ早いです。や、やっぱりお互いのことをもっとよく知って・・」
メイ「あーはい、今の反応でだいたい分かりましたから次の質問に

いきます。コーデリアさんのトイズについて詳しく聞かせてください。」
コーデリア「トイズですか？私のトイズは五感強化（ハイパーセンティシブ）。ドア越しに音を聞いたり、暗い中でも周りを見ることもできます。五感とは、視覚、嗅覚、聴覚、触角、味覚の５つでそれをすべて強化することができます。」
メイ「へー、すごいですね。」
コーデリア「いえ、それほどでもありません。便利なことばかりではありませんし。例えば、暗い中でトイズを使ったときに光が目にはいったりすると視覚がやられたりしますし。」
メイ「便利なばかりじゃないってことですね。ところでコーデリアさんはミルキィの中で１番年上ですが、みんなをまとめようとしているのはそういうところからですか。」
コーデリア「えぇ、やはり私が１番年上ですから。私がしっかりしなくちゃ。でも私時々失敗しちゃって。」
メイ「でもそこが愛嬌があったりしますよね。それに私もコーデリアさんのこと頼もしく思ってますよ。」
コーデリア「ありがとう、メイ。でも私もっと頑張らないと。」
メイ「あまり無理しすぎないでくださいね。そろそろ、終わりの時間ですね。」
コーデリア「あら、もうそんな時間なの。それじゃそろそろ失礼するわね。」
メイ「はい、コーデリアさんありがとうございました。では、また次回会いましょう。」

番外編1　メイ・マーブルの重要なファクターだ（後書き）

あまりオリキャラのメイを活躍させられていないので番外編ということでコーナーを担当させてみました。次回からまた本編に戻ります。

暴露開始２（前書き）

少し間が空きましたがそのわりには文章が短いです。文章はあいかわらず進歩なしです。

暴露開始2

小林「突然おたずねしてすいません。あなたが王偉さんですね。」
王偉「な、なんじゃ君たちは？」
小林「私は小林オペラです。そして彼女たちは探偵学院の子達です。」
王偉「探偵学院？なら用はない。出ていけ。」
小林「そういうわけにはいきません。商店街の爆破事件にはあなたも関わっているからです。」
王偉「わしはそんなものに関わっておらん。分かったら出て行け。」
小林「そうですか、あくまで関わっていないというなら僕たちも追求しなければいけません。さあ、聞かせてくれ、君たちが見つけ出した重要なファクターを。シャーロック。」
シャロ「はい。私は事件現場で銅鏡が必ず落ちていることに気づきました。いくら爆破があったとはいえ都合よく必ずあるのは何かあるんだと思います。」
小林「よし、ネロ、メイ。」
メイ「私たちは、保険金についての不思議な点を発見しました。」
ネロ「保険金がさぁ、爆破される少し前に掛け金が急に上がっているんだよね。」
メイ「これは無視できないポイントだと思います。」
小林「よし、エルキュール。」
エリー「はい、私は爆破されたビルのオーナーについて調べました。するとそのビルのオーナーは全部同じ人、つまり王偉さん、あなただったんです。」
小林「よし、コーデリア。」
コーデリア「はい、私はビルの空き部屋状況について調べました。爆破されたビルは全部古く、なおかつ入居者数が少なかったんです。これは、見過ごせない共通点です。」

小林「さらに付け加えるなら、あなたは最近のテレビで黄金鏡について自慢していましたね。おそらくそれであなたはそのため怪盗に狙われてこんなことを言ったんじゃないですか？黄金鏡は渡す、ただどこにあるのか分からないとね。そういって怪盗にいらなくなったビルを爆破させたんだ。」
王偉「ぐっ。」
ネロ「それにしても悪どいよねぇ。このおじさん。」
コーデリア「怪盗を利用するなんて。」
その時、後ろから声がした。
ラット「はははは。そんなこったろうと思ったぜ。」
王偉「お前は。」
小林「君が怪盗ラットだね。」
ラット「ああそうさ。さすが名探偵、さえない顔をしてるがこのビルまでたどり着くなんてよ。さて王偉、おとなしく黄金鏡を出してもらおうか。でないとこのビルを爆破するぜ。」
そういってラットは爆弾をとりだした。
王偉「ひぃ、待ってくれ。黄金鏡は、渡すからこのビルを爆破しないでくれ。」
ラット「じゃあ、さっさと出しやがれ。」
王偉「いますぐは無理だ。この外に黄金鏡はあるのでな。」
ラット「・・・・・、もうなんか面倒になってきた。このビルごと爆破させちまうか。」
王偉「ひぃ。」
そう言ってラットはこの部屋を抜け出した。
小林「奴が退路を確保したら本当にこのビルを爆破させられてしまいかねない。みんな追うぞ。」
ミルキィ「はい。」

暴露開始２（後書き）

大学生活のほうでこれから忙しくなるので次の投稿日は未定です。
かなり間があいてしまうかも・・・。

追跡（前書き）

ちょっと間が空きましたが投稿です。

追跡

小林達は怪盗ラットを追いかけた。前方にはモップがある。
小林「シャーロック、あのモップを。」
シャロ「はい。」
するとモップはラットのほうに倒れたため一瞬動きが止まり、ラットとの距離が少し縮まった。
ラット「くそ。」
ラットはそういうと隣の部屋に逃げ込んだ。小林達がその扉をあけると
ラット「ほーらよ。」
ラットが大量の爆弾のどれかに火をつけて蹴り転がした。
小林「コーデリア、火がついた爆弾を探すんだ。」
コーデリア「はい。」
コーデリアが五感を集中させると
コーデリア「あれです。」
見事火のついた爆弾を探し当てた。
小林「エレベーターはどこだ。」
メイ「こっちです。ついてきてください。」
そう言って走り出したメイを小林達も追いかける。エレベーターに着くと小林はネロに向かって指示を出した。
小林「ネロ、エレベーターを屋上まで上げてくれ。早く！」
ネロ「よし。」
ネロがエレベーターのボタン部分に触れるとあっという間に屋上までたどり着いた。そこで小林は
小林「エルキュール、この爆弾を。」
エルキュール「はい。」
そういうとエルキュールは爆弾を空高く投げた。その瞬間爆弾は爆発し、空一面に煙が広がった。

ミルキィはこの光景を見て
小林「なんてすごい爆弾なんだ・・・。」
エルキュール「こんなものがもし爆発していたら・・。」
メイ「このビルは木っ端みじんに。」
コーデリア「私たちもきっと・・・。」
ネロ「シャレになってない。」
ミルキィが軽く茫然としていると
ラット「最初からシャレのつもりなんてねぇ。」
ミルキィ「！！」
ラットが現れた。
ラット「くそう、こんなことって！」
小林「観念するんだ。」
ラット「うるせぇ、これが目にはいらねぇのか。」
小林「それは！！」
ラット「そうだ、大型の爆弾だ。これを爆発させている間に俺は逃げ切ってみせらぁ。」
そうラットが言った時、空気が変わった。
シャロ「なんですか、これは。」
ラット「ひぃ、まさか。」
？？？「ラット、やりすぎですよ。」
ラット「アルセーヌ様！！」
アルセーヌ「ラット、あれほど人を殺めてはいけないと言ったのに。」
ラット「いや、これは。ちょっとむかついちまったから。」
アルセーヌ「むかついたから人を殺めてもいいと？」
ラット「それは・・・。」
アルセーヌ「では帰りますよ。帰ったらお仕置きですよ。」
ラット「ひいっ。」
コーデリア「待ちなさい。」

アルセーヌ「残念ながらそういうわけにもいきません。時期が来るまでは。」
小林「時期？」
アルセーヌ「ええ、いずれお会いすることになるでしょう。では」
ラット「ひえー。」
そういうとラットの姿は消えていた。
小林「逃げられたか・・。」
メイ「あの、どうします？」
小林「そうだな、もうアルセーヌは逃げてしまっただろう。とりあえずこの爆弾を何とかしよう。みんなはビルに残っている人を避難させてくれ。」
ミルキィ「はい。」
そうしてラットのビル爆破事件は一応の解決を迎えた。

追跡（後書き）

次回は事件からは少し離れた話を書く予定です。

ビル爆破事件後（前書き）

今回の話からオリジナルを交えたミルキィと小林との出会いの話になります。

ビル爆破事件後

ビル爆破事件から数日がたった。ビルのオーナーは怪盗事件に加担したということで警察の捜査の手が入ったが事件の実行犯ではなかったこと、また自身も被害を受けたことなので実質おとがめなしの運びとなった。ミルキィ達はというと

シャロ「やっぱりかまぼこはおいしいですー。」
コーデリア「そんな急いで食べなくても大丈夫よ。ネロもそんなに急いでお菓子を食べないで。」
ネロ「ほーい。」
メイ「このケーキおいしいですね、エリーさん。」
エリー「はいっ・・。」
シャロ達は事件解決のご褒美として小林におごってもらったお菓子などを事務所で食べていた。そんな中メイがシャロに質問をした。
メイ「そういえばみなさん、小林さんとはどういう経緯で知り合ったんですか？　表舞台からは姿を消していたと聞いていたんですが。」
シャロ「初めて会ったときですか？公園でたまたま歩いていた先生に助けられたことがあって・・。それが初めての出会いです。」
ネロ「懐かしいね。といってもまだそんなにあれからたっていないんだよね。」
コーデリア「そうね、でもあれからいろいろとあったから。」
エリー「はい。」
そうしてシャロ達はメイ相手に初めて小林に会った時のことを話し始めた。

小林はその日、公園を歩いていた。何か気分転換になればと思ったのだ。つい先日、成り行きでミラジェル事件を解決してしまい軽く

自己嫌悪に陥っていたのだ。
小林「またやってしまった。」
そのとき小林の耳に悲鳴が聞こえた。
???「きゃー。」
小林「!!!」
小林は考えるよりも早く体が動いていた。
するとそこにはネコを抱えた女の子が木から落ちそうになっていた。
おそらく降りられなくなったネコを助けようとしていたのだろう。
女の子が木から落ちる直前小林は手を伸ばした。
そのとき小林は確かに声を聞いた。落ちていくなかでも絶望に沈むことなく強い瞳で叫んだその言葉を。
シャロ「がんばれ、私のトイズ。」
その強い瞳を見た瞬間、小林は自分のような絶望をこの子にあってほしくないと感じた。
小林（間にあえ。）
間一髪小林は女の子を受け止めることができた。女の子は何が起きたのかまだ把握していない様子だ。
小林「ふう、あぶなかった。大丈夫、けがはないかい？」
???「あ、はい。大丈夫です。」
そう言って女の子はネコを離した。ネコはお礼をしたのか前足をあげて立ち去って行った。
小林「ネコを助けようとしたのかい？」
シャロ「はい、でも私ドジだから足を滑らせてしまったんです。助けてくれてありがとうございました。」
小林「はは、けががなくて良かったよ。えーと・・」
シャロ「あ、私シャーロック・シェリンフォード15歳です。」
小林「シャーロックさんと呼べばいいのかな？」
シャロ「シャーロックでいいですよ。命の恩人ですから。」
小林「はは、大げさだな。僕の名前は小林オペラ。」
シャーロック「小林さんですか。さっきは本当にありがとうござい

ます。お礼にこのかまぼこをあげます。」
小林「え、いいよお礼なんて。」
シャロ「いえ、これは感謝の気持ちですから。ぜひ受け取ってください。」
小林「そこまで言うならもらおうかな。」
そういってシャロからかまぼこをもらい食べてみた。
小林「うん、おいしいね。」
シャロ「ありがとうございます、このかまぼこ私が作ったんです。」
小林「そうなのかい、すごいね。」
シャロ「いえ、私なんて全然すごくないですよ。」
そういったシャロの目は一瞬悲しそうな眼をしているように感じた。
それで小林は話題を変えることにした。
小林「そういえばさっき、トイズって叫んでいたけどもしかして探偵学院の子かい？」
シャロ「あ、はい。私なんかがですけど。」
小林「それじゃあ、君のトイズ見せてくれるかい？」
そういうとシャロはなぜかさらに沈んだ表情を見せてしまった。そして自分のリボンを外してトイズを使った。
小林「これはＰＫ。サイコキネシスか。」
シャロ「はい、でもちょっとでも重いものは全然持ち上げられないんです。しかも見えていないとだめ。役立たずなトイズなんです。」
そのセリフを聞いて小林は思わず話しかけた。
小林「そんなことはない。」
シャロ「小林さん？」
小林「確かにきみのトイズには制限があるかもしれない。でもトイズはいまだ謎の力。分からないことだらけさ。万能のトイズなんてない。君のトイズは必ず君の力になってくれる。君だけが起こせる奇跡なんだから。」
小林はそのセリフを言ってから少し恥ずかしくなってしまった。
小林（う、僕は初対面の子に何を熱く語っているんだ。怒っていな

ければいいけど)
ふと見るとシャロが泣いていた。
小林「ど、どうしたんだい。やっぱり僕のさっきの言葉が。」
小林はあわてたがシャロは
シャロ「いえ、違うんです。これは嬉しくて。」
小林「嬉しくて？」
シャロ「はい。こんな嬉しい言葉言われたのはじめてで・・・。」
小林「そうか、あのハンカチ。」
そうして小林はシャロが泣きやむまで待った。
小林「落ち着いたかい？」
シャロ「はい、すいません。」
小林「はは、いいんだよ。」
ふとシャロが公園の時計を見て叫んだ。
シャロ「あ、そろそろ友達と待ち合わせの時間です。」
小林「そうなのかい。じゃあ、早く行ってあげないと。」
シャロ「はい、今日はありがとうございました。また会えたらいいです。」
小林「はは、また会えたらいいね。」
シャロ「それでは。」
小林「またね。」
そうしてシャロと小林は別れた。この後、探偵学院で小林とシャーロック、いや小林とミルキィホームズが出会うことになるとはまだお互い思っていなかったがこの出会いが運命の出会いの始まりだった。

ビル爆破事件後（後書き）

次回は他のミルキィのメンバーと小林が接触する予定。

小林　探偵学院へ（前書き）

回想編の続きです。

小林　探偵学院へ

メイ「へえ、そんなことがあったんですか？」
シャロ「はい、あのときは本当に助かりました。」
ネロ「でもその後またシャロが落ちちゃうんだよね。コーデリアは暴走するし。」
コーデリア「あれはっ。」
メイ「そういえばまだこの話だと小林さんはシャロにしか会っていませんよね。」
エリー「小林さんがこの後、探偵学院にやってくるの。」
そうしてまた回想が始まった。

小林はホームズ探偵学院の前に立っていた。舘という老人によって連れてこられたからだ。
小林（ここが探偵学院か。）
小林はふと前に会ったシャーロックのことを思い浮かべた。あの子もここに通っているのだろうか。
舘「小林様。」
小林「はい。」
舘「何か考え事でも？」
小林「はい、ちょっと。ところで本当に僕なんかに用があるんですか。」
舘「はい、お嬢様が是非にと。連れてこなければ私が怒られてしまいます。」
小林「でも、僕はもう探偵じゃありませんよ。」
舘「しかしこの間の黒船事件を解決したそうじゃないですか。」
小林「あれは成り行きです。僕はもうトイズだってありませんから。」
舘「・・・。」

小林「そう、僕はもう・・・・。」
???「きゃー。」
そのとき小林達の耳に悲鳴が聞こえた。小林はその悲鳴を聞いて考えるより先に駆け出した。
小林「この声は聞き覚えがある。たしか先日公園で会った・・・・。」
悲鳴が聞こえた場所に行ってみるとシャーロックと名乗っていた女の子が落ちそうになっていた。
???「シャロ、しっかり。」
周りの女の子たちが助けようとしていたがその間にも女の子は落ちていき
小林「!!!」
小林は女の子が落ちようかというタイミングで腕を伸ばした。
シャロ「???」
前と同じように小林は受け止めた。
小林「大丈夫かい。シャーロックだったね。」
シャロ「あ、はい。」
小林「下ろすよ。」
シャロ「お願いします。」
小林はそう言ってシャロを下した。
小林「はは、またこんな形で会うとわね。」
シャロ「すいません、2回もこんなことになってしまって。」
小林「大丈夫、気にしないで。」
シャロ「はい。でもなんで小林さんがこんなところに?」
小林「それは・・・・。」
そのとき向こう側から走ってくるものがいた。
???「この変質者ーーー。」
小林「!!!」
???「シャロから離れなさーい。」
みると女の子が一人こちらへきていた。次の瞬間には小林は技を掛けられていた。

???「痴漢。」
さらにもう一度技をかけてきた。
コーデリア「変質者。」
さらに小林が気絶しかけている間に
???「犯罪者。」
これによって小林は完全に気を失った。
???「あなた誰なの？」
女の子は問いかけたがもちろん小林は気を失っているため答えられるわけはない。
シャロ「あの、気を失っていますし無理だと思います。それにこの人は・・。」
シャロがコーデリアを止めようとしたとき向こう側から走ってくる女の子が2人いた。
???「やめやめ、コーデリア。」
???「やめてコーデリアさん。」
2人は技をかけていたコーデリアを制した。
コーデリア「何をいってるの。この男は変質者で犯罪者でシャロを毒牙にかけたのよ。」
ネロ「全然、違うってば。」
エリー「この人はシャロを助けてくれて。」
コーデリア「そう、シャロを助けたんでしょ、許せるわけが・・・。えっ。」
コーデリアの動きが止まった。
コーデリア「本当なの、シャロ？」
シャロ「はい、落ちていくところを受け止めてもらったんです。もし、あのまま落ちていたら大けがをしていました。」
コーデリア「えーーー。」
コーデリアの絶叫が響き渡った。

小林　探偵学院へ（後書き）

次回は番外編を書くつもりです。

番外編２　メイ・マーブルの重要なファクターだ２（前書き）

前回の番外編の続きのコーナーです。

番外編2　メイ・マーブルの重要なファクターだ2

メイ「久々にやってきました「メイ・マーブルの重要なファクターだ」のコーナーです。今回もゲストキャラを呼ぼうと思います。今回はシャーロック・シェリンフォードことシャロです。」
シャロ「こんにちは、みなさん。シャーロック・シェリンフォードです。」
メイ「シャロといえば明るく天然というイメージがあります。いつも場を和ませてくれ時々良い勘を発揮することもあります。まずはシャロにトイズの説明をしてもらいましょう。」
シャロ「あ、はい。私のトイズは念動力で念じただけでものを動かすことができるというものです。それでもちょっとでも重いものは持ち上げることができなくて、しかも見えていないとダメなんです。でも小林先生に私のトイズは私だけが起こせる奇跡なんだって言われた時はとても嬉しかったです。」
メイ「本当いいことを言いますね、小林さんは。シャロはその小林さんのことをどう思っているんですか？」
シャロ「先生をですか？先生はとてもすごい人だと思います。出会った時から私のことを助けてくれて本当に感謝しています。先生が来てからミルキィのみんなと過ごす時間もさらに楽しくて素敵な思い出がたくさんあります。」
メイ「聞いてるこっちまで楽しくなるような語りですね。まあこの様子だと恋愛感情はまだ抱いてなさそうですね。それでは次の質問。シャロが探偵を目指した理由は？」
シャロ「それはですね、こんな私でも探偵になれば困っている人を助けられるかもと思ったからです。」
メイ「シャロらしい理由ですね。でも何かもうちょっと具体的なものはありますか？」
シャロ「具体的なものですか？うーんとそれは秘密です。」

メイ「秘密ですか？それじゃあしょうがないですね。それでは次の質問。シャロの好きな食べ物はかまぼこということですが、結構珍しいですよね。正月でもかまぼこって最後まで残ることが多いと思いますが。」
シャロ「かまぼこって本当においしいんですよ。スーパーによく並んでいるようなものでもおいしいんですけど手作りで作ってみるとさらにおいしいんです。昔、おばあちゃんが作ってくれたかまぼこは本当においしかったんですよ。」
メイ「そう聞くと私もかまぼこを食べたくなってきちゃうな♪では次で最後の質問。シャロの苦手なものは。」
シャロ「実はお化けとかが出るような暗いところが苦手で。」
メイ「そうなんですか？なんかお化け屋敷とか楽しんでいるようなイメージを持っていたんですけど。」
シャロ「そんなことないです。ジェットコースターとかは好きなんですけど。」
メイ「さてと、そろそろ終わりの時間です。シャロ、ありがとうございました。」
シャロ「こちらこそ、今日は楽しかったです。」
メイ「それでは明るい天然な少女、シャーロック・シェリンフォードさんでした。」

番外編２　メイ・マーブルの重要なファクターだ２（後書き）

次回は回想編に戻ります。

小林、探偵学院にて（前書き）

ミルキィホームズ結成編の3話目です。

小林、探偵学院にて

メイ「コーデリアさん、小林さんとそういう出会いだったんですか。」
ネロ「ふふ、あのときの暴走っぷりったら。」
コーデリア「うう、あのときは・・・。」
シャロ「でも先生がいなかったら私大変なことになっていたかも。」
エリー「今度から気をつけてね、シャロ。」
シャロ「はーい。」
メイ「ところでその後はどうしたんですか?」
シャロ「あ、はい。その後は・・・。」
そうして再び回想が始まった。

しばらくして小林の意識が回復した。意識が回復してからコーデリアは小林に何回も謝っている。
コーデリア「本当にすいません。」
小林「はは、気にしないで。」
コーデリア「お怪我はないんですよね。」
小林「うん、まあ何とかね。」
コーデリアも少し落ち着いたところでネロとエリーが声をかけた。
ネロ「怪我はないっていってるんだから大丈夫だって。それより僕たちからもお礼をいうよ。シャロを2回も助けてくれたんだって。」
エリー「ありがとうございます。」
小林「いや、そんな大したことは・・えーと、」
ネロ「僕の名前はネロ。譲崎ネロ。この学院の生徒さ。」
エリー「私は・・エルキュール・バートンといいます。」
コーデリア「私の自己紹介もまだでしたね。私はコーデリア・グラウカと申します。」
シャロ「でも本当にありがとうございます。一度ならず二度までも

助けてもらって。」
小林「いや、偶然だよ。」
ネロ「それでさー、ちょっと聞きたいことがあるんだけど。あんたは結局誰なわけ？」
小林「えっ。」
ネロ「この学園の関係者ってわけではなさそうだし。そうなると一体何の目的でここにいるの？」
コーデリア「ちょっと、失礼でしょ。シャロの恩人に向かって。」
ネロ「それとこれとは別問題。」
コーデリア「それは・・。」
ネロ「でっ、何してたの？言えないことしてたわけじゃないよね？」
そういいながらネロが迫ってきたため小林は思わず後ずさりしてしまった。するとそこに助け舟が現れた。
舘「ふぉふぉふぉ。さすがの名探偵も若さの前ではタジタジですかな。」
みんな「舘さん！」
舘さんが笑い声をあげながら現れた。
ネロ「うん？今名探偵って言ってたよね？」
舘「はい、こちらのお方はかの名探偵、小林オペラ様でございます。」
コーデリア「小林オペラ？」
エリー「コーデリアさん、もしかして？」
コーデリア「ええ。」
ネロ「知ってるの？」
コーデリア「ええ、それはもちろんってあなた知らないの？」
ネロ「うん。」
シャロ「私も名前は前に助けてもらった時に聞きましたけど有名人なんですか？」
コーデリア「有名なんてものじゃ。小林オペラといえば数々の難事件を解決してきた名探偵よ！この間の黒船事件だって解決したし、

伝説の大怪盗Ｌを倒したのだって全部小林オペラさんなんだから！」
コーデリアが熱くなって大声で小林のことを語ったので周りは耳を抑えた。
ネロ「わかったわかった。だからもう少し音量を下げて。」
エリー「コーデリアさん、落ち着いて。」
コーデリア「ぜいぜい。」
しばらくしてコーデリアがようやく落ち着いた。
ネロ「それで舘さん、結局何でこの人はここに？」
舘「はい、あなたたちと同じでお嬢様にお呼ばれしたからでございます。」
ネロ「ふーん、そうだったんだ。」
舘「それではせっかく皆さんが揃ったことですしみんなでお嬢様のもとに行きましょうか。」

そうしてみんなで生徒会長室に向かうことになったのだが小林は彼女たちが後ろから興味津々で見つめる視線が気になっていた。
小林（こうなるからあまり過去のことは知られたくないんだよな・・。）
そう思っているとシャロが口を開いた。
シャロ「あの、小林さん。歳はいくつですか？」
小林「え、１９だけど。」
シャロ「エリーさん、エリーさん。」
エリー「どうしたの、シャロ。」
シャロ「Ｌっていう怪盗がいなくなったのっていつですか？」
エリー「えーと、確か５年前・・。」
シャロ「えっ。ということは怪盗Ｌを倒した時の小林さんって１４歳！すごいすごい、今の私よりも年下じゃないですか！」
コーデリア「シャロったら騒ぎすぎよ。まあ無理はないけど。小林さんは事件を解決するその腕前もさることながら、その若さからも注目を集めていたのよ。」

シャロ「すごいすごい、私を助けてくれた人がそんな名探偵だったなんて。」
小林「違う・・・。」
小林の言葉にシャロたちが見つめた。
小林「僕はもう探偵じゃない。5年前、怪盗Lと争ったときトイズを失ったんだ。」
場を重い空気が襲った。
コーデリア「小林さんがトイズを失ったという噂は聞いていましたけど・・・。」
エリー「本当だったんですね。」
ネロ「地雷、踏んじゃったね。」
シャロ「そんな。」
小林は重くなってしまった空気を変えようとした。
小林「もう昔の話だから気にしないで。ただ、今の僕がダメになったという話だけだから。」
そのとき、シャロが声を出した。
シャロ「そんなことありません。」
小林「え?」
シャロ「例えトイズがなくたって小林さんは素敵です。2回も私を助けてくれましたし、それに小林さんは言ってくれました。私のトイズが私だけが起こせる奇跡だって。そんな素敵な言葉を言える小林さんは全然ダメなんかじゃないです。」
シャロのその言葉は決して大声ではなかったが、心に響く感じがした。
小林「シャーロック・・・。ありがとう。」
シャロ「あ、すいません。私勝手なこと言っちゃいました。」
小林「いや、そんなことは・・・。」
舘「あのー。」
小林「あっはい。」
舘「そろそろお嬢様の待っている場所に到着なのですが。」

小林「あ、はい。それじゃあ行きましょう。」
そう言って小林達が部屋に向かおうとするとＴＥＬＬＬＬＬ
小林「うん、誰かの電話かい？携帯の音にしてはずいぶん大きいみたいだけど。」
舘「私の携帯のようです。ちょっと失礼します。」
そういって舘は携帯を開いた。
舘「どうやら緊急の用件なので返事をさせてもらってもよろしいですか？」
小林「僕は構いませんよ。」
舘「では失礼して。私のような老人にはこの手の機械をいじるのは苦手でしてな。」
シャロ「あ、じゃあ私が教えてあげます。」
舘「ありがとうございます。しかしなんとかなりそうです。」
そう言って携帯の捜査が終わったころ
ガシャーン
窓ガラスか何かだろうか、部屋から何かが割れる音がした。
舘「これはお嬢様の部屋から。」
シャロ「え、それは大変です。」
コーデリア「もしかして会長になにかが。」
エリー「早く行きましょう。」
ネロ「そうだね。」
そうしてミルキィ達は走り出した。
小林（一体、今の音は・・・？）
小林もその後を追った。

小林、探偵学院にて（後書き）

次回から事件の話に入っていきます。

ミルキィホームズのトイズ（前書き）

今回は、短めです。

ミルキィホームズのトイズ

小林がドアの前に着くとミルキィ達が立ち止まっていた。
小林「どうしたんだい？」
シャロ「入れないんです。」
小林「え？」
エリー「鍵がかかっているみたいなんです。」
小林「それじゃあ、舘さん。合鍵で開けてください。」
ネロ「そっか、執事なら合鍵を持っているはずだよね。」
舘「それが無理なのでございます。」
小林「どうして？」
舘「合鍵は持ち合わせていないのでございます。」
小林「それじゃあ何か他に内部を調べる方法は・・・。」
コーデリア「私のトイズで調べてみます。」
小林「君のトイズで？」
コーデリア「はい、私のトイズは五感強化（ハイパーセンティシブ）で感覚を強化できます。これで中の様子を探るので少しの間静かにしていてください。」
そういってコーデリアがドアに耳を近づけたので小林たちは静かにした。
コーデリア「どうやら窓が割れていることは確かなようです。ただ、それ以上のことは・・・。」
小林「そうか、やっぱり中に入らないとダメか。」
ネロ「それじゃあ、ここはエリーの出番だよね。」
エリー「えー。」
シャロ「お願いします。会長の身の安全がかかっているんです。」
エリー「・・分かりました。その、それでお願いがあるんですけどみなさん、後ろを向いていてくれませんか？」
小林「？」
エリー「その、見られていると恥ずかしいから。」

ネロ「はいはーい、みんな後ろを向いて。ほら小林も。」
小林「え、ああ。」
そうしてみんなが後ろを向いた。
小林（恥ずかしいことっていったい何を・・？）
しばらくたった後、何かが壊れる音がした。
エリー「あの、もう大丈夫です。」
その声に小林たちが振り返るとドアが引きちぎられていて部屋の中が見えていた。
小林「ドアが・・。君のトイズは怪力？」
するとネロが説明した。
ネロ「正確に言えばエリーのトイズは強力な力に身体の質量増大と硬化が2つが加わっているのさ。」
小林「なるほど。」
エリー「あ、あのあまり見ないでください。」
小林「あ、ごめん。」
どうやらエリーは照れ屋のようだと思った小林は目線をすぐに外した。
シャロ「それじゃあ、早く中に入りましょう。」
小林「そうだね。」
そうしてシャロ達が中に入ってみると
小林「これは・・。」
中は窓ガラスが割れているほか、様々なものが氾濫していた。
コーデリア「これはひどい。」
舘「私、警察に連絡いたします。」
そう言って舘は携帯電話を取り出したが
舘「あ、すいません。充電切れのようです。公衆電話まで行ってまいります。」
コーデリア「あ、私の携帯を貸しますよ。」
そういったものの、舘は行ってしまった。
ネロ「行っちゃたね。」

エリー「うん・・・。」
シャロ「これからどうしましょう。」
ネロ「とりあえずちょっとここのコンピューターをのぞかせてもらって防犯カメラの映像を確認しようかな。」
小林「え、そんなことできるのかい？」
ネロ「うん、僕のトイズは電子機器に触れることでそれを操ることができるんだ。何かしらの媒体を通すとやりやすいんだけど。」
そういうとネロはコンピューターのところに行って防犯カメラの映像を確認した。
ネロ「全然ダメだ。なにも怪しいものは写っていない。」
シャロ「そうですか・・。」
コーデリア「そう、それじゃああとは警察が来るのを待つしか・・。」
ネロ「いや、ここは現場検証をしよう。」
コーデリア「現場検証？だめよ、私たちはまだ探偵じゃないのよ。ライセンスを持っていないのに現場検証なんて。」
ネロ「なら、なおさらじゃない。警察が来たらもう手は出せないよ。」
シャロ「私も捜査をしたほうがいいと思います。現場のものに触れなければいいと思います。」
コーデリア「シャロ！」
エリー「私も捜査をするべきだと思います。」
コーデリア「エリーまで！」
ネロ「それじゃあ捜査するということで決まりだね。」
そういってみんなで捜査を始めたのでコーデリアも捜査を始めることになった。

小林（おいおい、何てことだ。これは立派な事件じゃないか。）
小林はため息をついた。さっき舘さんが戻ってきて泣きながら捜査に協力してほしいと頼まれ断れず捜査に協力することになったのだ。

小林（まさか、この学園に来てこんなことになるとは・・・。いや、でも待てよ。ここは怪盗に対抗するために作られた数少ない探偵学院だ。怪盗に対して探偵の数は圧倒的に少ない。ということは、ここが狙われる可能性も決して低くない。）

小林は捜査を始めた。

ミルキィホームズのトイズ（後書き）

次回から捜査編が始まります。オリジナルの手掛かりを考えようかと思っているんですけどいいのが思いつかなかったらかなり苦しいものになるかもしれません・・・・。

捜査開始（過去編）（前書き）

１か月以上ぶりの更新です。読んでくださっている方にはすいません。その間にミルキィホームズの過去などを描いた物語が４か月連続でダウンロード配信されることが決まったそうです。自分も今から楽しみです。

捜査開始（過去編）

メイ「それが、ミルキィのみんなが初めて遭遇した事件なんですね。」
ネロ「うーん、まあ事件といえば事件なんだけどもね。」
メイ「どういうことですか？」
コーデリア「最後まで聞けば意味は分かるわ。」
エリー「うん、小林さんがこの後すごかったの。」
シャロ「それじゃあ、話の続きをしますね。」
そうして再び回想シーンとなる。

小林は手分けして捜査していたミルキィのみんなにまず声をかけてみることにした。それというのもみんなが小林が怪しいと感じて捜査しようと思っていた場所を捜査していたからだ。まず、小林はシャロに声をかけてみることにした。
小林「やあ、シャーロック。」
シャロ「あ、小林さん。」
小林「この辺りが気になるのかい？」
シャロ「はい、ここから犯人が出ていったんですよね。」
小林「あの窓ガラスの音が真実ならね。」
シャロ「え、どういうことですか？」
小林「シャロ、よく見てごらん。窓ガラスの破片の切れ目を。」
シャロ「切れ目？そういえばすべて真っ直ぐにきれいに切れて散らばっている・・。あ！」
小林「そう、それは重要なファクターだ！」

シャロと話した後、次に小林はネロに声をかけることにした。
小林「えーと、ネロ？」
ネロ「うん、何？」

小林「いや、君はここに何かあると思うのかい？」
ネロ「うん、そうだね。なんかさ、ここが変な気がするんだよね。」
小林「そうだね、確かに変だ。」
ネロ「小林はさ、何か気づかない？」
小林「そうだな、そこの倒れてる家具かな。」
ネロ「家具？」
小林「ああ、よく見てごらん。そこの倒れてる家具の下を。」
ネロ「下？・・・・何もないよ。」
小林「やはりか、舘さーん。」
舘「はい。何でしょう。」
小林「この家具ってどれくらい前からここに置いてありますか？」
舘「もう１０年以上前から置いてあると聞いております。」
小林「そうですか、ありがとうございました。」
舘「では、これで。」
舘はドアの前に戻って行った。
ネロ「ねえ、小林さっきの舘さんの言葉。」
小林「ああ、この家具が１０年以上前から置いてあったとすると跡の１つもついてないのはおかしい。」
ネロ「ということは。」
小林「そう、これは重要なファクターだ！」

次に小林はエリーの元を訪ねた。
小林「やあ、エルキュール。捜査は進んでいるかな？」
エリー「あ、小林さん。はい、ちょっと気になるものを見つけました。」
小林「気になるもの？」
エリー「はい、これ何ですけども。」
そう言ってエリーが差し出したものはローラーカッターだった。
小林「これはローラーカッターだね。」
エリー「ローラーカッター？」

小林「うん、俗に言うガラスカッターでガラスを切るのに用いているんだ。昔はガラスを切るときはダイヤカッターと言ってダイヤで切っていたんだけど切るのが難しくて今ではローラーカッターが主流なんだ。これは現在主流のロールガラスカッターだね。」
エリー「なるほど、そうなんですか。」
小林「実はあっきシャーロックのところに行った時の窓ガラスの破片を調べたんだけど、切れ目が割ったというより切った感じだったんだ。」
エリー「え・・、それじゃあもしかしてこのカッターに残っていたガラスの破片って。」
小林「そう、これは重要なファクターだ。」

小林は最後にコーデリアのところに行った。
小林「やあ、コーデリア。捜査は進んでいるかな?」
コーデリア「あ、小林さん。はい、実は携帯電話を発見したんです。」
小林「携帯電話?もしかして会長のかな。」
コーデリア「はい、さっき舘さんに確認しました。あと、周りに落ちていた会長のノートも見つけました。」
小林「ノート?」
コーデリア「はい、緊急事態なので読ませてもらいました。それによると会長は私たちが来る5分前にはここにいたみたいなんです。」
小林「5分前か。やはり変だ。」
コーデリア「どうしたんですか?」
小林「ノートにそのことが書いてあるとすると5分前には犯人はこの部屋にはまだいなかった、少なくとも部屋の状態はいつも通りだったことになる。でもそうすると・・・。」
小林は今までの捜査をコーデリアに話した。
コーデリア「確かにおかしいですね。そんな作業を犯人が会長もいる中で5分間でできるとは思えません。そもそも会長を5分の間で

どうにかするのも大変でしょうし。そうするとこれは・・・。」
小林「ああ、これは重要なファクターだ！」

小林は４人のところを1通り回ると1人で考えていた。
小林（４人の探した重要なファクターによって事件の真相が見えてきた。おそらくは・・・）
その時、奥の方から物音が聞こえた。
小林「どうしたんだ！」
４人と一緒に駆けつけてみるとそこには倒れた舘さんと正体不明の謎の人物がいた・・・。

捜査開始（過去編）（後書き）

オリジナルを加えながら「重要なファクター」を変えてみましたが、少し無理があったかもしれません。ガラスカッターのくだりなんてあまりメジャーではありませんし・・。次回はついに犯人の正体が分かります。

暴露開始（過去編）（前書き）

久しぶりの投稿です。これでとりあえずは推理は終了です。

暴露開始（過去編）

メイ「やっぱりそのころから小林さんの捜査はすごかったんですね」
ネロ「正直最初はどんなものかと思っていたけどね。」
シャロ「でも本当にすごいのはこれからなんです。」
そして、また回想が始まった。

小林達の前に倒れている舘さんと仮面をかぶった人物がいた。
小林「舘さん！」
シャロ「大丈夫ですか？」
怪盗「ははは、大丈夫さ。軽い催眠剤を掛けただけだからね。」
小林「お前は一体？」
怪盗「私か？私は怪盗だよ。」
どうやら舘さんに抵抗されたのか、カラーボールを多少仮面にかけられていた。
エリー「それじゃあ、あなたが会長を。」
ネロ「わざわざ現場に戻ってくるなんてずいぶん大胆なことをするんだね。」
コーデリア「会長を返しなさい。」
怪盗「それはできない。ただ、少々興味ある人物がいたものでね。ちょっと戻らせてもらったよ、小林君。」
小林「僕を知っているのか。」
怪盗「そうさ、あの怪盗Ｌを倒したという伝説の名探偵。怪盗の間で君を知らない方がおかしいだろう。つい先日も、難事件を解決したそうじゃないか。」
小林「あれはたまたまだ。成り行きで解決しただけだ。」
怪盗「しかし、事件を解決したということはトイズが戻ったという噂は本当だったか。」
小林「違う！トイズは戻ってない。」

怪盗「ほう、ということは結局噂は噂だったということか・・。しかし、そんなことはどうでもいいのだよ。私には復活した小林オペラが私を取り逃がした、そういう噂がたてばね。」
そういうと怪盗は逃げ出した。
小林（あいつ、僕を怪盗の名声を高めるために利用する気か！）
小林「みんな！」
ミルキィ「はい！」
小林「みんな、怪盗を追いかけるぞ。」
小林が大きな声をだしたため、みんな少し面喰った様子だ。しかし、小林が駆け出すとみんな、怪盗を追いかけた。

怪盗「ふふ、やはり追いかけてくるか。」
小林「待て！」
怪盗「そうもいかなくてね。」
そういうと怪盗は何かを廊下にばらまいた。
小林「これは撒菱（まきびし）！」
何と撒菱がばらまかれた。撒菱は一般的にはアニメなどの影響により鉄製のものをイメージされがちではあるが、鉄製のものは個人で使うのには向いていない。そのため、実際は個人で使う場合は木や竹から削りだしたものなどを使っている。今回もそのパターンのようだ。
小林「シャーロック、あの撒菱を端に寄せるんだ。」
シャロ「はい。」
鋼鉄製でないため、撒菱の重さは重くないため、シャーロックのトイズで簡単にどかすことができた。

小林達は、さらに怪盗を追いかけていると目の前の扉が閉められた。
小林「これは、オートロック式の鍵か。」
見たところ、機械で制御しているようだ。
小林「ネロ、あの鍵を。」

ネロ「ＯＫ。」
そういってネロは金属のヘラを鍵に差し込んで鍵を開けた。
鍵を開けると、道が二つに分かれていた。どちらかへ行ったようだが、鍵を開けている間に進んだらしい。
小林「コーデリア、カラーボールの臭いを探すんだ。」
コーデリア「はい。」
小林は怪盗がカラーボールを掛けられていたことを思い出し、指示した。あのカラーボールには匂いが有るタイプのものだった。
コーデリア「こっちです。」
コーデリアは右の道を指差し、小林達は右の道に進んだ。

右の道を進むと怪盗がいた。
小林「もう逃げられないぞ。」
怪盗「ふふ、それはどうかな。」
そういうと怪盗は、何やらスイッチを押し、強風を起こした。
小林「風はかなり強く、立っているのがやっとの状態だった。」
怪盗「さてと、ではさらばだ。」
小林「く。エルキュール、頼む。」
エリー「あ、はい。」
エルキュールはトイズを使った。すると体が重くなり、飛ばされなくなった。
エリー「見ないでください。」
怪盗「何！」
そう言ってエリーは近くにあった消火器を怪盗に投げつけた。怪盗は間一髪でよけたが、機械は壊れて風がやんだ。
怪盗「ふふ、さすがだね。これは降参かな。」
小林「さてと、これで話ができますね。怪盗・・、いやアンリエット・ミステール会長。」

ミルキィ「え！」
小林がそういうと怪盗、いや会長は仮面を外した。
会長「どうして分かったんですか。」
小林「何かずっと違和感があったんだけど、彼女達が見つけてくれた重要なファクターのおかげかな。」
ミルキィ「私たちが？」
小林「ああ、まずはシャーロック、君の見つけ出した重要なファクターを教えてくれ！」
シャロ「あ、はい。窓ガラスの割れ目なんですけどきれいに割れていたんです。これは、音から推測できる窓ガラスの割れ方と矛盾していると思います。」
小林「次、ネロ！」
ネロ「はーい、僕が見つけたのは家具なんだけどね。これ自体は不思議でもなんでもないんだけどね、どかしてみると跡の一つもなかったんだよね。あんな大きいものが倒れておいて跡がつかないということはあらかじめ倒してあったか、時間をかけて倒したと考えられると思うな。」
小林「よし、エルキュール。」
エリー「あ、は、は、はい。私はロールカッターを見つけました。シャロの見つけた窓ガラスの割れ目はこれでつけたとすると推測できると思います。」
小林「よし、コーデリア。」
コーデリア「はい。私は机のまわるに落ちていたものの状況から会長は私たちが来る五分前には部屋にいたと考えられます。つまり短時間の間に会長がいなくなった。これは重要なファクターだと思います。」
小林「彼女たちが見つけた重要なファクターから僕はこう考える。つまりあの現場は全て事前に作られたもの。怪盗はもとからいなかったんだとね。」
怪盗「ははははは、その推理通りだとすると私は誰になるのかね。」

小林「それは部屋の状況から証明されている。」
怪盗「何。」
小林「あの部屋の状況は時間をかけて作りだされた。そして生徒会室においてそんな行動を不審をもたれずにやれる人物は一人だけだ。そう、お前、いやあなたの正体は今日僕たちが会うはずだったアンリエット・ミステールその人さ。」
小林がそういうと怪盗は仮面を外して、
会長「さすがですね、小林さん。」
といった。

暴露開始（過去編）（後書き）

読んでみるといろいろと矛盾があるような・・・。過去編もようやく終盤に入ります。

ミルキィホームズ結成（前書き）

今回で過去編は終わりです。

ミルキィホームズ結成

メイ「えー、会長が犯人だったんですか！」
シャロ「はい、あのときはとっても驚きました。」
ネロ「まあ、この後も驚きの展開だったんだけどね。」
コーデリア「まさか、私たちが教官と一緒に事件を担当することになるなんてね。」
エリー「この話もそろそろ終わりですね」
再び回想が始まった。

会長「ふふ、騙していてごめんなさいね。」
ネロ「でも何でこんなことをしたのさ。」
会長「それをお話しする前にこの映像を見てください。」
そうして会長が見せた映像は
小林「これは・・・！」
会長「そう、アルセーヌと名乗る怪盗からの挑戦状です。アルセーヌは今までと違い、怪盗同士で協力してくると宣言しました。その名も怪盗帝国。」
コーデリア「そんな・・・怪盗が徒党を組むなんて。」
小林（確かに。今まで怪盗はほとんどが単独犯だった。ここにきて手を組むとなるとやっかいだぞ。」
会長「それであなた達にお願いがあります。怪盗が手を組んだ以上、探偵たちも手を組んで事件を解決してはどうかという提案がこの学園にもなされました。それで我が学園からはあなた達四人をそのチームに任命しようと思います。」
シャロ「えー、それって私たちが怪盗事件にチームとして当たるということですか？」
会長「はい、その通りです。」
ネロ「はいはーい、質問。」

そこにネロから質問が入った。
会長「はい、何でしょう。」
ネロ「何で僕達を選んだのさ？正直そこまで優秀とは思えないんだけど。」
会長「そうですね、確かに成績だけで言えばあなた達より優秀な人はたくさんいます。しかし、それはあくまで個人での話。集団で動くとなるとまた別なのです。探偵は単独行動で動くことが多く、相手の足を引っ張ることも珍しくありません。そんな中、あなた達はとても仲良く、この計画に最適だと思ったのです。」
ネロ「ふーん、なるほどね。」
会長「実は小林さんを呼んだ理由もそれにあるのです。」
小林「僕を呼んだ理由がその計画にあるんですか？」
会長「はい、実はこの子たちをそのチームに任命する際にあなたに指導を頼みたいのです。」
小林はなんとなく話の流れからその話が出てくるだろうなとは思っていたものの、それを受け入れるかというと微妙な話であった。
小林「でも僕はもう探偵をやめた身です。トイズもない僕にできることなんて・・・。」
会長「例えトイズがなくてもあなたの経験はこの子たちにとって役に立つはずですよ。さっきだって推理をしている小林さん、輝いていましたよ。」
小林「それは・・。」
するとシャロ達もお願いしてきた。
シャロ「小林先生、私早く先生みたいな立派な探偵になりたいです。」
小林「先生！」
コーデリア「教官、私からもお願いします。」
小林「教官！」
エリー「私も・・お願いします。」
ネロ「まあ、おもしろそうだし。僕からもお願いしまーす。」

小林「うっ。」
四人からも頼まれて小林は観念した。
小林「ふう・・・。分かりました。引き受けますよ。」
「やったー。」
そのセリフを言った時、四人はみんな一斉に喜んだ。
会長「ありがとうございます。ところで小林さんは住む場所に困っているとお聞きしたので、こちらで部屋を用意させてもらいましたのでどうぞ。」
そう言って会長は小林達をある部屋に連れて行った。

シャロ「うわー。」
小林達が連れてこられた部屋は、昔の探偵が使っていそうなシックな部屋だった。
会長「どうでしょうか？小林さんはこういう部屋がお好きかと思いまして。」
小林「確かに好きですけど。」
会長「良かったです。」
シャロ「あの、私たちはこれからこの部屋を捜査室として使っていいんですか？」
会長「もちろんです。」
シャロ「わーい。」
コーデリア「ここが、これからの私たちの捜査室。」
エリー「すごい・・。」
ネロ「お、冷蔵庫に何か入ってる。」
会長「ふふ、みなさんに気に入っていただいたみたいでよかったです。」
シャロ「あ、そうだ。せっかくだから記念写真を撮ろうよ。」
コーデリア「いいわね。」
会長「それじゃあ、私がカメラを持ちます。」
そう言って会長がカメラを構えた。

会長「いいですか、それじゃあ撮りますよ。」
そう言ってカメラのシャッターを押そうとした時
シャロ「あー。」
小林「ど、どうしたんだい、シャーロック。」
突然、シャロが大声をあげた。
シャロ「私、思いついちゃった。みんな、ちょっと集まってください。」
そう言ってシャロはみんなと何やら相談をした。そして、みんな何か納得したような表情をしていた。
小林「何を話してたんだい？」
シャロ「私たちのチーム名です。小林先生も入った5人のチームの名前です。」
会長「ふふ、相談は終わりましたか。それじゃあ、シャッターを切りますよ。」
シャロ「はい、みんな私たちの名前は？」
シャロが掛け声をかけるとみんなは
「ミルキィホームズ！」
と未来の探偵を目指すチームの名前を叫んだ。

ミルキィホームズ結成（後書き）

次回は小林オペラとミルキィのみんなを少し絡ませたいなと思っています。

ミルキィホームズ　バイキングへ（前書き）

今回は久しぶりに選択肢を入れてみました。

ミルキィホームズ　バイキングへ

メイ「ミルキィホームズってそういういきさつでできたんですか？」
コーデリア「まさかあのときは教官が私たちの指導をしていただけるなんて思っていなかったわ。」
エリー「私も・・。」
ネロ「でも頼み込んだら案外簡単に引き受けてくれたよね。」
シャロ「そうですね。私、嬉しかったです。」
小林「お、みんな。何の話をしてるんだい？」
そこに小林が帰ってきた。
シャロ「あ、先生。今、メイさんにミルキィホームズ結成までのことを話してたんです。」
小林「あー、あの時のことか。ちょっと恥ずかしいかな。」
メイ「いえ、お話を聞いて改めて小林さんはすごいなと思いました。」
小林「はは、照れるな。」
コーデリア「でも本当にすごかったですよ。」
しばらくそんな雑談が続いた後に
小林「そうだみんな、今週の日曜日って空いているかい？」
シャロ「日曜日ですか？私は大丈夫ですけど。」
他のメンバーも空いていると答えると
小林「それじゃあみんな、実はさっき商店街の福引で懸賞が当たったんだ。それでみんなと一緒に夕飯を食べようかと思ったんだけどどうかな？」
ネロ「行く行くー。おいしいものが食べられるなら見過ごす手はないね。」
コーデリア「私も行きたいです。」
エリー「わ、私も。」
メイ「みんなと一緒に食べれるなら私も行きます。」

シャロ「私もみんなと一緒なら。」
みんなが行きたいと賛成した。
小林「うん、それじゃあ今度の日曜日に一緒に行こうか。じゃあ、この部屋で当日待ち合わせということでいいかな？」
みんなが了承して、日曜日にみんなで一緒に食事をすることになった。

日曜日、小林が一足先について待っていると最初にドアを開けて入ってきたのはバイキング形式の店だった。
シャロ「わあー、この店にあるもの全部食べ放題なんですか？」
小林「ああ、そうだよ。」
店の中には、コーナー別に食品が並べられており、種類も豊富だった。
ネロ「それじゃあ、僕はケーキから食べようかな。」
コーデリア「ネロ、あなたはいきなりデザートから食べるの？」
ネロ「へへ、まあね。」
そう言うと、ネロはすぐにでケーキコーナーへと行ってしまった。
コーデリア「あ、ネロ！まったく、食い意地が張ってるんだから。」
小林「それじゃあとりあえずみんな好きなものをそれぞれ取ってこようか。好きなものを取ってきたらここに集合ということで。」
メイ「はい、分かりました。それじゃあ私は麺コーナーに行ってきます。」
エリー「私は・・・えーと、和食コーナーに行きます。」
コーデリア「私はまずはドリンクコーナーに行こうと思います。おいしそうな紅茶があったので。」
シャロ「私は洋食コーナーに行こうと思うんですけど、先生はどうしますか？」
小林「僕？そうだな・・・。」

（選択肢）

1：ケーキコーナーへ行く
2：麺コーナーへ行く
3：和食コーナーへ行く
4：ドリンクコーナーへ行く
5：洋食コーナーへ行く

ミルキィホームズ　バイキングへ（後書き）

次回は小林がミルキィのみんなとバイキングを回ります。

バイキング選択肢（ネロ）（前書き）

アニメのミルキィホームズ二期が２０１２年1月から始まり、ＰＳＰソフト「探偵オペラ　ミルキィホームズ　２」も２０１２年８月発売予定と、ミルキィ好きの自分には嬉しいニュースばかり。
さて、今回はバイキングの続きで今回はネロの話です。

バイキング選択肢（ネロ）

1：ケーキコーナーへ行く

小林「ケーキコーナーを見てみようかな。」

コーデリア「分かりました。」

そうして、みんなそれぞれ自分の行きたいコーナーへと散って行った。小林もケーキコーナーに行ってみると、そこではネロが早くも自分の食べるケーキを選んでいた。

ネロ「あ、小林。小林もケーキを先に選びに来たんだ。」

小林「うん、こういうところのケーキってどんな感じになっているのか少し気になってね。」

ネロ「一通り見てみたんだけど、ここのケーキコーナー結構品揃えがいいよ。」

小林「へー、そうなのか。それは楽しみだね。」

ネロ「せっかくだから僕がお勧めのケーキを紹介してあげようか。」

小林「ここに来たばかりなのにもうお勧めのケーキが分かるのかい。」

ネロ「どのケーキがおいしいかぐらいは、なんとなく分かるよ。」

小林「へー、それはすごいな。それじゃあ、お願いしようかな。」

ネロ「任せてよ。」

こうして、小林はネロにケーキ選びを手伝ってもらうことにした。

小林「本当に種類が豊富だなあ。」

ネロ「言ったとおりでしょう。中でも僕のお勧めはねー。」

そう言ってネロが持ってきたケーキは

小林「それはミルフィーユ。」

ネロ「正解。ミルフィーユのミルフイユ・オー・フレーズっていうんだって。」

小林「確かクリームとイチゴが混ざっていて冷やして食べるものだよね。」

ネロ「へー、小林ってケーキにも詳しいんだね。」
小林「たまたま聞いたことがあっただけだけどね。ネロのお勧めだしこのケーキにするよ。」
ネロ「それじゃあ、ケーキはこれで決まりだね。」
小林「そうだね。他のコーナーに行こうか。」
そうして、小林とネロはケーキを選んだあと、他のコーナーの食べ物をとって一旦机に戻った。

小林「他のみんなはまだ選んでいるみたいだね。」
戻ってみるとみんなはまだ机にいなかった。いろいろと種類があるからまだ迷っているのだろう。
ネロ「そうだ、小林。ちょっと口をあけて。」
するとネロが何かを思いついたように言った。
小林「どうしたんだい？」
ネロ「いいから。」
少し疑問に思いながらも口をあけると
ネロ「はい。」
小林「！」
ネロがケーキを口の中に入れた。
ネロ「へへ、おいしい？」
小林「え、うん。」
ネロ「うん、それは良かった。それじゃあ僕も食べよう。」
そうしてネロは小林に食べさせるのに使ったフォークでケーキを食べようとした。
小林「ちょ、ちょっと待って。」
ネロ「うん、どうしたの？」
小林「いや、そのまま口の中に入れたら間接キスになっちゃうんじゃ・・・。」
ネロ「僕は気にしないけど。」

本当に気にしてないようにネロが言った。とは言ったものの小林は気になるわけで
小林「いや、僕が気にする。」
ネロ「別に減るものでもないし、大丈夫だけどな。シャロ達とはよくやってるし。」
小林「いや、僕は男だし色々と問題があるとというか・・・。」
ネロ「しょうがないなあ、それじゃあこのフォークは小林が使ってよ。僕は新しいフォークで食べるから。」
ネロが折れたので小林はその提案に乗ることにした。
小林「それでお願いするよ。」
ネロ「ふふ、それにしても小林って結構こういうことは駄目なんだね。」
小林「うっ。」
それから小林はみんなが選び終わって帰ってくるまでからかわれた。

バイキング選択肢（ネロ）（後書き）

次回もバイキングの続きです。

バイキング選択肢（メイ）（前書き）

２０１１年最後の投稿です。

バイキング選択肢（メイ）

2：麺コーナーへ行く

小林「麺コーナーへ行こうかな。」

メイ「あ、それじゃあ私と一緒ですね。一緒に回りましょう。」

小林とメイは一緒に麺コーナーを回ることになった。

メイ「わー、豊富な種類がありますね。」

小林「そうだね。」

そこでは、ラーメン一つとっても醤油ラーメンのようなメジャーなものからマイナーなものまで豊富な種類が揃っていた。

メイ「うーん、どうしましょう。」

小林「まあ、ゆっくり決めればいいと思うよ。」

メイ「そうですか。それじゃあお言葉に甘えちゃいます。」

そうして、メイはどれにするかじっくり悩み始めた。そして、メイは悩んだ末にパーコーメンと呼ばれるラーメンを選んだ。パーコーメンとは、豚肉を醤油ラーメンに乗せた中華料理の一種である。小林もせっかくなので同じメニューを選んだ。

メイ「わぁ、パーコーメンおいしそうですね。」

小林「うん、そうだね。」

メイ「パーコーメンにのっている豚肉って普通の豚肉とどうちがうんでしょう。」

小林「パーコーメンにのっている豚肉は豚のあばら肉に卵と小麦粉の衣をつけて油で揚げているものをのせた中華料理なんだ。日本でも売り出している店が結構あるみたいだよ。」

メイ「へー、小林さんはやっぱり物知りですね。すごいです。」

小林「そうかな？さて、選び終わったし他のコーナーも見てみようか。」

メイ「そうですね。」

そうして二人は他の食べ物のコーナーを回った。

そうして他のコーナーを戻ってみると、まだみんなは戻っていないみたいだった。
小林「まだみんな戻ってないみたいだね。」
メイ「そうですね。みんなには悪いですけれども麺がのびてしまうので先に頂いてましょうか。」
小林「うん、みんなには悪いけどそうしようか。」
そうして小林たちは先にパーコーメンを頂くことにした。
メイ「初めて食べたんですけどおいしいですね。」
小林「そうだね。評判がいい店なだけはあるね。」
メイ「でも本当にありがとうございます。」
小林「いや、この店にこれたのは懸賞に当たったからだし、そんなにお礼をいわれるほどじゃ・・。」
メイ「いえ、それだけではなくて小林さんには感謝しているんです。今、私がこうしていられるのはみんなが私を受け入れてくれたからです。特に小林さんには色々とお世話になりました。」
小林「そう言ってくれると嬉しいね。でもこうしているのは君自身が頑張ったからだよ。僕は少し手助けをしようとしただけでさ。」
メイ「そうやって謙虚なところも素敵です。私、やっぱり・・・」
小林「あ、みんな戻ってきたみたいだね。」
メイ「あ、本当ですね。」
見ると他の四人がメニューを選び終わり戻ってきていた。
小林「ところで何かいいかけていたようだけど何だい。」
メイ「あ、大したことじゃないので気にしないでください。」
小林「そう？それならいいけど。」
メイ「それじゃあ、みんなで頂きましょう。」
メイは戻ってきた四人にそう言ってそれからはみんなで楽しく食べた。

バイキング選択肢（メイ）（後書き）

次回も選択肢が続きます。２０１２年もよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7139r/

探偵オペラ　ミルキィホームズ物語

2011年12月31日23時53分発行